

# 歴史の授業と教材

## —見方・考え方について—

大友 秀明 埼玉大学教育学部社会講座

キーワード：見方・考え方 歴史学習

### 1. はじめに—「社会的な見方や考え方」と「社会的な見方・考え方」

本稿では、歴史的事象を素材にしながら、「社会的な見方・考え方」を深める視点・切り口、学習問題・課題を取り上げてみたい。「社会的な見方・考え方」については、現行の学習指導要領では「社会的な見方や考え方」と表記されている。まず現行の「社会的な見方や考え方」の語用・用例について整理しておく。おおよそ、以下の4つに分類することができる。

①社会科が取り扱う領域（歴史、地理、政治・経済・社会）に固有な「視角」である。社会的事象を空間・時間的比較、関連、総合などの視点からとらえることである。

②社会的事象を読み解くときの「概念的枠組み」である。我々は、情報を入手したとき、何らかの枠組みに即しながら考察し、その情報の意味や価値を見いだそうとする。公民的分野で取り扱う「対立と合意」、「効率と公正」などはその例である。

③社会科学における「概念」や「理論」である。この場合、学習の内容とその成果と重なる。経済学習の「市場経済の基本的な考え方」の概念は、学習内容であるが、その概念を通して経済的な「見方や考え方」を習得することができる。学習対象そのものが「見方や考え方」である。

④社会科の目標の「観点」を構造化したものである。それは、具体的な事実に関する知識・理解、その社会的な意味・概念、価値判断の3つの相でとらえられる。ここに、知識・理解、思考・判断、技能・能力、関心・態度の観点が包摂されることになる。

次期の学習指導要領では、「社会的な見方や考え方」から「社会的な見方・考え方」に「や」から「・」に標記が変わったが、その意味について、以下のようにとらえている。

「社会的な見方・考え方」は、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法であると考えられる。そこで、小学校社会科においては、「社会的事象を、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」を「社会的事象の見方・考え方」として整理し、中学校社会科、高等学校地理歴史科、公民科においても、校種の段階や分野・科目の特質を踏まえた「見方・考え方」をそれぞれ整理した。その上で、「社会的な見方・考え方」をそれらの総称とした。

## 2. 歴史学習の基礎・基本

### 2-1 「歴史的な見方・考え方」と歴史意識

次期の学習指導要領の改訂に際して、「社会的な見方・考え方」とは何かが議論され、整理されている。次期学習指導要領の中学校歴史的分野の「歴史的な見方・考え方」については、以下のようにとらえている。

- ①社会的事象を、時期、推移などに着目してとらえること
- ②類似や差異などを明確にすること
- ③事象間同士を因果関係などで関連付けること

つまり、歴史的事象を「推移・変化」「比較」「因果関係」の視点からとらえ、中学校の歴史的分野では、次の能力の育成が図られている。

- 1 時代の転換の様子や各時代の特色を多面的・多角的に考察する力
- 2 歴史に見られる諸課題について、複数の立場や意見を踏まえて選択・判断する力

また、この「歴史的な見方・考え方」に類似した概念として、従来「歴史意識」が使われていた。この歴史意識に関しては、信濃教育会教育研究所の斎藤博の先駆的研究がある。そこでは、歴史意識を、①今昔の相違がわかること、②変遷（発達）がわかること、③歴史的因果関係がとらえられること、④時代構造がわかること、⑤歴史の発展がわかることの5つに分析し、発達段階の特色を明らかにしようとした<sup>1)</sup>。

このほかにも、かつて、歴史意識に「歴史的興味・関心」、「歴史的自覚と意志」、「判断と批判」などの視点を加えている研究も行われた<sup>2)</sup>。

「歴史的な見方・考え方」あるいは「歴史意識」が、歴史学習や社会科教育の授業とどのように結びついていくのかを究明する必要がある。

### 2-2 歴史学習のねらい

「歴史的な見方・考え方」「歴史意識」は、社会的事象をとらえる視点や方法である。教師は、これを手掛かりに発問を考えることができる。しかし、社会科教育としての歴史学習の真のねらいは何か。

歴史学習は、歴史的事実の知識の量を増やしていくことでも、史実を絶対化し、それに基づいて一定の結論を得ることでもない。歴史学習のねらいの一つは、「自ら多面的・多角的に考え、公正に判断できる子ども」の育成にある。これは、歴史学習だけで果たせるものではない。すべての教育活動がここに集約される必要がある。

また、社会科としての歴史学習では、「歴史的事実と考えられている社会的事実を対象にして、子どもに社会を認識させること」が大切である。その立場から必要なことは、「子どもにとってわかりやすい極めて少ない歴史的事実を素材にして、子どもたち一人一人が社会を認識していくのと同じ手法でそれをふくらませ、自分で納得できる歴史的社会像を構成させ、それをとおして、個

性的な歴史的社會像の形成を意図すること」になる<sup>3)</sup>。

### 2-3 「見方・考え方」の育成のポイント

子どもたちが歴史的社會像を自分なりに構成するために、どのような指導のポイントが考えられるか。

第一に、学習問題の明確化、学習計画の立案、追究、まとめと吟味という子ども主体の学習過程を重視することである。特に、授業が成立するためには、子どもにとって切実な学習問題を把握させることである。

第二に、具体的な事実に即して、思考を展開させることである。そのためには、歴史的な事実に対して、様々な視点から考え、わかったことをつなげながら具体的理解を深めさせることである。イメージを広げさせる資料を選び、発問や助言を工夫し、資料を深く読み取らせることである。

第三に、子ども自身による意見表明の機会を設定することである。事実に基づいた客観性を持たせながら、恣意の意見・考えについては、教師による助言、子ども同士の話し合いを通して自己修正・更新させていくことになる。

要するに、「子ども自身が関心・興味をもち、自分たちの力で主体的に問題を追究していく方法を考え、調べ、吟味して結論（多様であってよい）を出していける」学習を構成することが大切である<sup>4)</sup>。

## 3. 歴史学習の切り口—教科書記述の変化から

### 3-1 学習問題と学習課題

授業において最も大切なことは、学びの核、エネルギーとなる学習問題を子どもたちが把握していることである。

学習問題は、子どもが関心・疑問を抱き、追究しようとしているものであり、学習課題は、教師が子どもを支援して、子どもに獲得させたいと考えているものである。学習課題は、子どもとしては、関心・疑問などをひたすら追究していき、教師としては、それを通じて、到達させたい目標である。

教師は、子どもが関心をもち、学習意欲を引き出す学習問題をつかませ、それが歴史の本質的な事項・目標に迫り、「社会的な見方・考え方」を成長させたときに学習課題が成立したことになる<sup>5)</sup>。

### 3-2 「鎌倉幕府」の始まり

学習の切り口の一つとして、鎌倉幕府を取り上げてみる。鎌倉幕府が開かれた年は、「いい国つくろう」という語呂合わせがあるように、源頼朝が征夷大將軍となった1192年と教科書には記述されてきた。

しかし、近年では鎌倉幕府を構成する組織が1180年から徐々に設置されるなど、1192年までの間に段階的に整備されたと考えられているという。鎌倉幕府に関する主な動きは、以下のとおりである。

1 1180年：頼朝の東国支配の樹立、鎌倉に侍所の設置。

2 1183年：朝廷より頼朝の東国支配権の承認。

- 3 1184年：公文所・問注所の設置による行政機構の整備。
- 4 1185年：平家滅亡と各国に守護・地頭の設置。
- 5 1190年：頼朝が右大将（右近衛大将）に補任。
- 6 1192年：頼朝が征夷大將軍に就任。

目下、鎌倉幕府の成立の時期は特定できていない。これは、「鎌倉幕府」の本質をどう考えるかによって歴史家や研究者の見解が異なっているからである。ここで学習にとって大切なことは、「鎌倉幕府」「鎌倉時代」という歴史的事実は、「絶対」ではないということである。「時代区分」はのちの歴史家はその考え方や視点に応じて定めたものであるから、様々な説が出されることになる。

このことを通して、子どもが「時代区分」というものの考え方を知ること、自分なりに時代を考える力を獲得することが重要である。

### 3-3 変わった歴史教科書の記述から

歴史は、資料・史料によって叙述されたものである。したがって、資料・史料の吟味（批判すること、本質を知ること）が大切になる。

新旧の歴史教科書をヒントに、学習問題の切り口を探ってみよう。

事例①「江戸時代の外交」：ある資料からは日本が国を鎖していたように見えるし、別の資料から見れば、四つの口（長崎・対馬・薩摩・松前）を通して外国のものや情報が入っていたとも見える。外交について、資料によって異なる解釈になることがわかる。

事例②「江戸の都市生活」：新しい教科書の大型化、ビジュアル化の中で、浮世絵・絵画・図像資料や絵地図などが教材となっている。

例えば、江戸城、その周囲の大名屋敷、日本橋の賑わい、郊外の寺社を描き、様々な年中行事や朝鮮通信使までも書き込まれている『江戸図屏風』から自ら興味ある事柄を見出し、その意味を考えることもできる。

また、江戸のリサイクルの様子、そば・すし・天ぶらの屋台での商売、様々な職人の姿など当時の庶民の生活を読み取ることのできる教科書もある。

事例③「江戸の身分制度」：歴史研究の進展により、「士農工商」、「慶安の御触書」が教科書から姿を消しつつある。江戸時代の身分を「士農工商」の四つではなく、武士と百姓・町人の二つに分け、被支配者の百姓は村に住み、町人は都市に住んでいた。百姓＝農民ではなく、村には漁業・林業などの様々な産業に従事した人がいた。

幕府が農民の暮らしを規制していたといわれる「慶安の御触書」についても、発令年や発令主体に疑問がもたれている。

新旧の教科書では、記述内容や視点、教材、資料がどれだけ変化したのかを知ることによって、研究の進展によって教科書の記述が変わること、「歴史は変わるもの」ということを実感できるの

ではないか<sup>6)</sup>。

## 4. 「生活文化」―「晴（ハレ）」と「穢（ケ）」

### 4-1 生活文化の内容

「歴史的な見方・考え方」を育てるための、一事例として、生活文化を取り上げてみよう。生活文化を見るためには、「文化財」が重要な資料になる。「文化財」は、文化財保護法によると次のように分類されている。

- ①有形文化財：建造物 絵画 工芸品 書跡 典籍 古文書 考古資料など
- ②無形文化財：演劇 音楽 工芸技術など
- ③記念物：貝塚 古墳 都城跡 旧宅など
- ④民俗文化財：衣食住・生業・信仰・年中行事などの風俗慣習および民俗芸能と、これらに用いられる衣服・器具・家屋
- ⑤伝統的建造物群：周囲の環境と一体をなし歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの

歴史学習では、これらの領域のすべてを取り上げることはできない。これらの領域から、どの地域にもあって、誰でもがかかわり、しかも子どもたちの興味・関心を引き起こす内容を選択する必要がある。

このような観点から、一般に、①衣食住、②人の一生、③年中行事、④口頭伝承を中心に生活文化を全体的に見ていく方法がとられている。その学習の視点を示す。

- ①衣食住―地域的特色、生活階層の特色、職能による相違、時代的特色、歴史的変遷
- ②人の一生（通過儀礼）―行事の形態・意味、使用される道具
- ③年中行事―行事の形態、行う人々、慣習や技術の伝承の仕方、祭りの意味
- ④口頭伝承―時代の人々の意識やものの見方・考え方

### 4-2 生活文化を学ぶ意義

生活文化を学習する意義はどこにあるのか。我々が日常生活を送るなかでなにげなくしている行為や行事が、現在だけのものであるとはいいきれない。いくつかの例を示そう。

人の一生は通過儀礼とも呼ばれている。それぞれの人生には、日常的な普段の生活である「ケ」と、人生の折目ごとに行われる「ハレ」の儀礼がある。人の一生には、①誕生、②成人祝い、③婚姻、④死、などの節目・折目がある。また、年中行事は、一年に特別な「ハレ」の日を置き、儀礼を行う。この「ハレ」の行事には、一般の「ケ」の日の衣食住とは異なる特別な衣服、食事、居宅での作法がある。この「ハレ」の行事にこそ、基層文化＝生活文化ともいべき伝統的な要素が受け継がれている。

このような「ハレ」と「ケ」の意識は、現在のわれわれの生活意識の深層で維持されている。

たとえば、旧暦のお盆のころになると都会から故郷に帰る。墓参りをするためである。墓参りとは死者と会い、死者と交流することである。年中行事の「ハレ」の日の祭りの本質は、①神・死

者を迎える、②供物を捧げ、神をもてなし神と人が交歓する、③神を送り出す、という3つに要約される。お盆に里帰りをする人は、死者と出会う機会を自らつくっていることになる。

また、日本人の忘年会や新年会は、我々の円環的時間意識の産物である。つまり、我々日本人の意識のなかには、365日が単位となって、一年たつてふたたびまた新しい一年が繰り返すという考え方がある。記念日は過去に起こった事件を思い起こし、それを現在のものとして意識しようとする行事である。

このように、我々は、一年間のうちで時折、広い意味での宗教的儀礼を営むことによって、毎日の繰り返しの生活の過程に区切りをつけ、翌日からの勤労にはずみをつけている。このような意味をもっている儀礼が、年中行事である。

このように過去から現在までに伝わっていることに目を向け、改めて、現実の生活や社会が歴史的に形成されてきた今があることを実感するのではないか。

#### 4-3 生活文化学習の方法

生活文化の学習が、日本人の物の考え方や行動の底を流れている意識や慣習（過去の心性）をとらえることを目指すとすれば、我々は自らの心性の底に流れ込んでいる過去に探りを入れなければならないということである。そこから、現在のわれわれの意識の底に過去がしのびこんでいることを実感し、各時代が今日の社会生活にどのような影響を与えたかがわかるのではないか。

歴史は、人々が生活の中で体験したことを語り、それを叙述したものである。歴史の発展を具体的に把握させるためには、日本人の生活文化である衣食住、年中行事などを取り上げ、教材構成を工夫する必要があるだろう。

また、生活文化である有形文化財については、身近な地域の博物館や郷土資料館等の施設を活用し、子ども自身による観察や調査活動を取り入れることもできる<sup>7)</sup>。

### 5. おわりに

本稿で取り上げた内容をまとめておこう。

新学習指導要領では、「見方・考え方」のイメージを明確にし、その内実の充実を図った。また、社会科の目標の方向性を「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つに明確にした。

ここで取り上げた「歴史的な見方・考え方」や歴史意識は、子どもが教材を考察・追究するための視点や方法である。教師は、いわば「見方・考え方」「歴史意識」を設計図に発問・教材を選択し、授業を構成することができる。この設計図を基に、教師は授業を施工することになる。その学習問題の切り口として、新旧の教科書記述の変化からの事例を提案した。時代区分（時代の始まりと終わり）を取り上げたが、現在についても社会の変化を捉えるためには、過去の社会がどのように変化してきたのかを知ること、つまり一つの時代が終わり、別の時代が始まるという時代区分の意識を持つことは意味を持っていると考える。

また、「見方・考え方」を育てる事例として、「生活文化」を素材にした。生活文化を通して、我々の意識の源流にたどりつくことができる。歴史を学ぶ意義を考える契機になる。我々は、なぜ歴史に関心をもつのであろうか。我々は、単に昔のことを知るために過去に取り組むのではない。現在についての正しい判断を得るために過去に問いかけるのであろう。つまり、現代の歴史の動き

を正しく認識し、現代の歴史のなかに積極的に生きていくために歴史を学ぶのである。

しかし、現在、何が問題なのか、どこに矛盾があるのか、といった問題意識をもつことなく、漠然と過去に問いかけたところで、現在をどう生きるかを知ることはできないであろう。歴史的思考は現在から始まる。

新学習指導要領の中学校社会科歴史的分野の目標には、「社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ」とある。どのように「働かせ」るのが課題であろう。定式化・体系化された「見方・考え方」だけを働かせるのではなく、子どもの自由な思考を妨げないように配慮する必要があるだろう。

#### 注

- 1) 斎藤博「歴史的意識の発達」(信濃教育会教育研究所紀要19集、1953年)(上田薫編集代表『社会科教育史資料4』1977年、所収)
- 2) 古川清行「歴史意識とその育成」(講座・歴史教育2『歴史教育の方法と実践』弘文社、1982年、所収)
- 3) 山田勉『歴史・政治教材と教科書検定』(国土社、1989年)
- 4) 市川博『子どもの姿で探る問題解決学習の学力と授業』(学文社、2015年)
- 5) 同上書
- 6) 新旧の教科書記述については、荒木肇『昭和と平成の教科書読み比べ あなたの習った日本史はもう古い!』(並木書房、2013年)、高橋秀樹(他)『ここまで変わった日本史教科書』(吉川弘文館、2016年)を参考にした。
- 7) 「生活文化」については、佐藤照雄『歴史学習指導の視点と方法』(東京法令出版、1980年)、加藤章『戦後歴史教育史論』(東京書籍、2013年)を参照にした。
- 8) 詳細については、拙稿「社会科教育における『文化学習』の意義と可能性」(埼玉大学紀要教育学部第63巻第1号、2014年)を参照。

なお、本稿は雑誌『社会科教育』(2016年9月号、2017年5月号、2017年7月号)に掲載された拙稿を再構成したものである。

(2017年10月31日提出)

(2017年11月18日受理)